

平成 28 年度 財団せせらぎ 助成金使用報告書

| | | | | | |
|--|-------------------|------------------------|--------------------------|------|-----------|
| 所属 | 京都大学大学院人間・環境学研究科 | 職名 | 博士後期課程 | 助成金額 | 200,000 円 |
| 氏名 | 平井 瑛子 | 印 | メール アドレス | | |
| 研究課題（申請書に記入した内容を記入すること。） | | | | | |
| 近世から近代における乾山イメージの受容と変遷 | | | | | |
| 助成金使用実績の概要（日本語で記入すること。図・グラフ等の記載は必須ではない。） | | | | | |
| <p>研究の概要</p> <p>尾形乾山（一六六三～一七四三）は、江戸時代中期の京焼陶工である。京都の呉服商・雁金屋の三男として生まれ、兄に絵師・光琳がいる。乾山は書画にも通じたが、特に陶芸の分野で才能を開花させた。</p> <p>乾山焼とは、尾形乾山が元禄十二年（一六九九）に京都の鳴滝泉谷で創始したやきもの名称である。乾山焼の研究では、乾山焼の製作年代を、鳴滝で本焼窯を開いた元禄十二年（一六九九）から正徳二年（一七一二）に鳴滝窯を廃窯するまでの鳴滝時代、市中の二条丁子屋町に移転した正徳二年から江戸へ下向したと考えられている享保十六年（一七三一）頃までの二条丁子屋町時代、江戸へ下向してから寛保三年（一七四三）に乾山が没するまでの江戸入谷時代の三期に分けることが通例である。</p> <p>近年の乾山焼の研究では、仁和寺の公式録『御室御記』の記載を根拠として、乾山焼は、鳴滝窯の開窯当初から商売を目的とした手工業製品であったとする見解が主流となっている。しかし、このような見解が主流となったのは最近のことで、昭和二十三年の『乾山 京都編』をはじめとする先行研究では、乾山が鳴滝で開窯する以前に隠棲生活を送っていたことを理由に、鳴滝時代の乾山焼は乾山の余技であり、二条丁子屋町時代に入ってから本格的な焼物商売がはじまったとする見解が主流となっていた。習静堂における隠棲生活などの乾山伝記によって、乾山に対するイメージが形成され、乾山イメージは、乾山焼の研究にも影響を与えてきた。</p> <p>本研究では、乾山イメージと乾山焼の関係性を明らかにするため、乾山および乾山焼に関する江戸時代の資料を収集し、乾山焼が生産されていた江戸時代から、乾山に対してどのようなイメージが形成されていたのか、乾山焼はどのようなやきものとして認識されていたのかについて考察を行った。本研究での成果をまとめた論文は、学術誌への投稿を予定している。</p> <p>助成金の使用用途</p> <p>資料収集のため、大学図書館等を訪問し、資料の閲覧および複写を行った。助成金の主な使用用途は以下の通りである。</p> <p>1. 資料収集</p> <p>① 国立国会図書館デジタル化資料サービスにおける資料の複写代</p> <p>② 各大学図書館までの交通費等（京都－東京）、資料の複写代</p> <p>2. 美術全集等の関連書籍の購入</p> | | | | | |
| 助成金を使用した成果に関する発表（インターネットに公表されている場合は URL を記載すること。） | | | | | |
| 発表者氏名 （著者・講演者） | 発表課題名 （著書名・演題） | 発表学術誌名 （著書発行所・講演学会） | 学術誌発行年月 （著書発行年月・講演年月） | | |
| | | | | | |